

授業実践の様相—解釈的研究

— 社会科公民的分野において —

田 代 裕 一

An Interpretative Study on Verbal Aspect of Learning Process:
A Case Study of Teaching in Civic Field of
Junior High School Social Studies

Yuichi Tashiro

1. 研究目的

本稿でいう授業実践の様相—解釈的研究とは、重松鷹泰が提唱した「授業分析」¹⁾に原理面で依拠しつつ、授業の構造的全体像を作成して、その全体像を分析検討の際、共通の判断基盤にして、授業の特徴・問題等を解釈し指摘するという授業研究である。その際に、「発言表」²⁾というツールを用いているが、この「発言表」は、話し合いを主とした授業を対象にして、授業でのコミュニケーション過程と学習内容の展開過程を統一的に表現することを目指すものである。筆者は現在まで60例以上の授業実践（社会科、生活科、総合的な学習での問題解決学習の授業が多くを占めるが）を「発言表」を用いて分析してきた。このことによって問題解決学習の授業における話し合いの過程の特徴を示すことはある程度できたように思う。今後は、この授業分析の成果から授業づくりに向けて参照可能性³⁾のある要素や局面をフィードバックして示していく必要があると考えた。

実際、教育現場では授業分析から、授業づくりに向けてより直接的な示唆を得たいという要望は強いのである。例えば、授業分析を主要な授業研究の方法として用いている「社会科の初志をつらぬく会」においても、次のような提言が出ている。堀部健一郎は、本会の授業研究・授業分析の課題を「明日への糧

となる授業研究・授業分析のあり方」と「より子どもが見えてくる授業記録のあり方」の2点とし、特に前者に関して、「重松は、授業分析は50年100年かかる作業であるとしているが、明日への効果が見えないことで授業分析を敬遠する教師も少なからずいる」と述べ、授業研究・授業分析の本質を見失わず、明日への希望（よい授業の実現）となる授業研究・授業分析のあり方を模索する価値はあるのではないかと述べている。⁴⁾ その一方、授業はそれぞれ異なる条件の上に成立するものであり、記録された過去の授業の分析結果が、即刻、直接的に他の、これからの授業づくりに有効に転移することができると思えるのは難しい、という指摘もある。⁵⁾ このような課題への対応を考える際に、教育実践からの参照可能性という観点は非常に重要である。それは、授業分析の特質を踏まえつつ、授業づくりに貢献することを可能にする方途だからである。

まず、重松自身、授業分析をどのように考えていたのか、見てみたい。重松は、授業分析は授業そのものの改善を図ることを狙うというよりも、授業改善に貢献すべき教育理論そのものを強靱に真に実践を指導する力を持ったものにしてしようとする狙いを持つと述べている。⁶⁾ しかし、その一方で、授業分析の実践的な成果についても示している。重松は1954年に「授業分析」を始めたが、その実施から約20年を経た後に、「授業分析」の発展（一応の成果）について述べている。⁷⁾ その内容は以下の5点にまとめられている。①教師の自己変革 ②こだわる子の再評価 ③教師の出場 ④教材の選定 ⑤評価への道。①から③については、成果があがっていることが具体的に述べられている。④に関しては、望ましい教材の要件をまとめ上げるには至っていないが、教材はあるきまった形でそこに在るというのではなく、子どもたちの手でいろいろに展開していくことがわかってきた、と記されている。⑤について、重松は評価を子どもの可能性とその発展の契機を明確にする活動ととらえ授業研究の究極の目標に位置づけているが、現状はまだはるか手前にある、けれども、きわめてゆっくりとその方向に歩みつつある、と述べている。このように仮のまとめとしてはあるが、その成果（授業づくりに対しても有効と思われる成果）を実際、示している。このような経緯を踏まえて、今回、重松が整理した「授業分析」

の成果に関する項目に準拠しつつ、授業実践の様相—解釈的な研究（「発言表」を用いた授業分析）が、どのような点で授業づくりに貢献できるのか、検討していきたい。

2. 研究方法

前述したように授業の様相—解釈研究では、「発言表」というツールを用いているので、以下、「発言表」の作成について簡単に述べておく。⁸⁾「発言表」は基本的に、発言者名欄及び、発言状況欄からなる。発言状況欄には、授業記録上の全発言の長さを、縦の実線として記入する。本研究では授業記録（雑誌「考える子ども」等に掲載）での発言記録の二行分（一行…今回は24字程度）を罫線の実線の一単位分になっている。さらに、授業において用いられた主要な言葉を記号化して載せている。ここでいう「主要な言葉」とは、授業の内容的構成を把握する上で重要なものと分析者が判断して、選択した言葉を意味している。なお、1回の発言で、同一の「主要な言葉」が複数回出て、1個のみで表している。さらに、表中で注目すべき発言は点線で囲み、また、発言と発言の関係を線や矢印（…は言及的な発言、…→は反論、←……→は質問—応答や議論といった双方向的なやり取りなど）で表している。右の発言内容の欄には、その授業での内容展開や言語的応答関係を示す上で、重要と思われる言葉を抽出して記載している（原文の約4分の1）。「発言表」の原版はB4判サイズだが、紙面の都合上、縮小している。

3. 研究対象

今回、取り上げる事例は、Y県A中学校3年生T先生指導の社会科公民的分野の実践（「よりよい社会を目指して—強かに生きる—」2017年12月13日実施）である。この実践を取り上げた理由は、授業での子どもの発言が多く、これから日本の教育で重視される「主体的、対話的で深い学び」として参考になると思われること、また、持続可能な社会、よりよい社会の形成に関して、地域の農業を取り上げて幅広く追究しており、学習内容の点からも注目に値すること、などである。さらに本実践は他の授業研究者も注目しており、筆者（田

代)とは異なる観点・手法から既に授業分析が実施されている。⁹⁾なお、本実践は「社会科の初志をつらぬく会」¹⁰⁾の全国集会で提案されている。この実践は国立大学の附属中学校で行われた。

4. 授業分析

授業記録は、本会の機関誌「考える子ども」387号 2018年8月(118頁～137頁)に掲載されている。T先生は次のような意識で本実践に取り組んでいる(記述より一部抜粋)。

恵まれた家庭環境で育ち、附属という特殊な学校で多くの子どもは9年間を過ごしてきた。…略…学校評価アンケートの結果からも、学校生活への満足度は極めて高い。素晴らしい学校であると思う反面、外界から守られた温室のような環境で育った子どもは、荒海に放り出されて生き抜いていけるのだろうか。卒業後、それぞれの進路で力を発揮し、成長を続けるためには「強かさ」が足りない、と痛感した。そこで本実践「強かに生きる」を構想することにした。

(単元について)

…衰退の一途を辿っている日本の農業であるが、そんな中でも、農業で着実に生計を立てて暮らしている農家がある。…略…一見、八方塞がりのように見えるものでも、見方によっては、切り込み方によっては、大いに太刀打ちできるのではなかろうか。冷静に状況を分析し、独創的なものの見方で打開策を見つけて、「強かに」取り組んでいくこと。これこそが、先行き不透明な農業の世界で生きていくことであり、我がクラスの子どもが、先行き不透明なこれからの社会を生き抜く上で必要な力ではなかろうか(下線は筆者による。以下も同様)。

単元の展開

【第1・第2時】(筆者が少し整理してまとめている)。

幻の米とよばれるミネアサヒを紹介。その後、O市の農家数および生産量の推移を示した生産構造分析調査の結果を提示。

【第3～5時】

日本の農業の現状について追究。

【第6時】

日本の農業の現状について、前時までの追究をもとに意見交流。次に政府が出している「食料・農業・農村基本計画」を読む。…そこには、農業を成長産業と捉えた「強い農業」の姿が示されていた。日本の農業は、「強い農業」になり得るのかという問題を共有する。

【第7・8時】

日本の農業は、「強い農業」になり得るのか、という問題の解決に向けて、農家、専門家、官公庁などに取材。主な取材対象は14箇所。

【第9・10時】

日本の農業は「強い農業」になり得るのかという問題について、取材をとおして考えたことをもとに、「追究まとめ」を作成。その後、「追究まとめ」を読み合う。

【第11時】

日本の農業は「強い農業」になり得るのか、という問題について、学級全体で意見交流。

*今回、対象として分析する授業。

【第12・13時】

これまでの学びをもとに「私が考える強い農業のイメージ（第12時）、「3A（クラス名）が考える強い農業の姿（第13時）」について、学級全体で意見交流。

【第14・15時】

これまでの学習を振り返り、単元まとめを作成。

○授業の分節

「日本の農業は『強い農業』になり得るのか」2017年12月13日

以下の分節分け、および分析は筆者による。本研究で取り上げる授業は上記の単元での第11時である。事例の分析に際しては、文末の「発言表」を参照されたい。アルファベット（2文字）は子どもの仮名、Tは教師の略号、Cは

不特定多数の子ども、もしくは発言者不明の子どもの略号である。なお、本授業記録は授業者自身が作成したものである。また、元の授業記録では発言番号が記されていない発言も今回、カウントして番号を付したので、元の授業記録よりも発言番号が増えている。

・ 第1分節（日直1～T6）

授業開始の挨拶を日直とCで行っている。教師が本時の課題を述べて、生徒を指名している。

・ 第2分節（HN7～T24）

後継者不足の状況や新規就農者を増やす方策について発表している。

・ 第3分節（KZ25～T32）

耕作放棄地の利用について意見を出している。

・ 第4分節（SE33～T44）

県の農業政策や様々な農業（ネット販売、メディア活用、機械化など）について調べたことを発表している。

・ 第5分節（YD45～T68）

農業にはお金がかかることが報告され、国からの支援がもっと必要であるという意見が出ている。

・ 第6分節（TY69～TY99）

TYが有機栽培をしている農家について詳しく報告している。

・ 第7分節（T100～KY117）

農業とICT、企業との連携、農作物を売り込むビジネスや農業の学校の必要性、農家と消費者との結びつき方など、農業と他の分野との関係について発言が出ている。

・ 第8分節（T118～日直127）

教師が今までの子どもたちの発表を3種類（大規模、先進的、個人）にまとめ、個人でやる農業は大丈夫かと尋ねている。子どもたちは、農家をサポートしてくれる企業があることや直売のメリットについて発言している。教師は授業日記を終了後に書くよう指示している。

○授業の発言状況…コミュニケーションの過程

授業全体での教師の発言は54回、子どもの発言は73回で、教師と子どもの発言回数比は1対1.35である。子どもはC(不特定・多数)を除いて24名(日直は発言した他の子どもと重複している可能性があり、その場合は23名になる)が発言している。附属校ということで40名近い定員だと考えると、ほぼ6割の子どもが発言していることになる。分節の最初は第7分節、第8分節を除いて子どもたちの発言である。子どもから4単位以上の発言が24回ある。またそのうち、8単位以上が8回と、長い発言が多い。TYは11回発言している。MAは1回だが、18単位の発言がある。本授業では、あまり活発な議論は起きていないが、子どもたちの意見が次々と関連的に出されている。教師は54回の発言中1単位が42回、2単位が9回と、短い発言が多い。

第1分節では、日直とCが1単位の短い発言を交互に出して、挨拶をしている。教師はT6で2単位の発言をして、本時の内容を確認している。

第2分節では、6名の初回発言者が列挙的に発言している。各自3単位から8単位の比較的、長い発言をしている。AKは教師と対応しながら3回発言している。教師は9回発言しているが、T18の2単位以外は1単位の短いものである。

第3分節では、初回発言者のKZが教師と対応しながら発言している。教師はT28で3単位の比較的長い発言をして、これまでの子どもたちの発言を整理している。その後、TZ、MKが発言しているが、この2名は第1分節でも発言している。教師はT32で、子どもたちの発言を補足説明している。

第4分節では、4名の初回発言者が出ている。TRとMSは2回発言している。教師は6回発言して、子どもの発言を確認したりしている。

第5分節では、5名の初回発言がある。MA59は18単位の長い発言をしている。最後の方でKZ67も9単位の発言をしている。KZは第3分節でも発言している。

第6分節では、TYが教師やCと対応しながら11回発言をしている。TY69は5単位、TY89は8単位の長い発言であるが、それ以外は1単位が7回、2単位が2回と、短い発言が多い。教師は8回発言して、TYの発言内容を確認

している。Cも1単位の発言を11回している。それ以外の発言はDS91の1回だけである。

第7分節では、3名の初回発言がある。各自8単位から9単位の長い発言をしている。またYKは教師と対応しながら4回発言している。KYも2回発言している。その他に、TYの1単位の発言がみられる。

第8分節では、教師がT118で7単位の長い発言を出して、これまでの子どもたちの発表を整理している。その後、KYとMKが発言し、さらに2名の初回発言がある。教師はT126で3単位の発言をして、簡単に本時をまとめ、次の指示を出している。

以上のように、本授業は子どもたちが自分の調べたことや意見を、次々に順番を意識しながら比較的長く発表することが多かった。授業の終わりの箇所でも初回発言者が現れて長く発言していた。第3分節や、第5分節、第8分節では、それまでに発言していた子どもが再度出て、比較的長く発言していた。教師は発言者の指名の他に、子どもたちに問いかけて、その発言内容を明らかにしようとするような短い発言が多かった。教師は特に第6分節でTYに多く対応していた。

○主要な言葉の展開状況…学習内容の展開状況

本授業では多くの主要な言葉が出ていたが、教師が子どもより先に用いているものはなかった。

第1分節では、主要な言葉は出ていない。

第2分節では、HN7が若者、3K、新3Kを用いて、日本の農業が後継者不足になっている理由や、その対策を発表している。AK9は収入、イメージ、新3K、若者、メディアを用いて、農家に行ってみたらイメージと違ってきれいで楽しそうだったので、メディアを使って新3Kを若者に広める、と具体的な案を出している。教師はT12でメディアを用いて、勝手にメディアが広めてくれるのかとAKに問い直している。この発言にはやや他人事のような意見に対し当事者意識を持たせようとする意図があろう。さらに教師はT18で3Kを用いて、これまでの発言者がイチゴ農家に調査に行っていたことを確認し、

どういう農家だったのか教えるよう依頼している。MK19は若者、お金、土地を用いて、その農園を説明し、さらに新規就農者にとって農業をする土地が少ないので、制度を変えるべきだと述べている。MB21も3K、イメージ、支援、機械、お金、収入、若者を用いて、公表されていない支援がもっと発信していくと農業へのイメージを変えられる、と述べている。TS23は大規模、耕作放棄地、土地、収入、イメージ、若者を用いて、耕作放棄地を預かって大規模な農業をして儲けている人がいる、そのことを発信すれば新規就農者が増える、と発言している。本分節では子どもから若者が6回、イメージが4回、収入が3回、3K、新3Kなどが2回出て、後継者不足の問題が出され、農業の3Kのイメージを変える、大規模農家は儲かることや支援について発信する、といった対策が述べられていた。ここで、耕作放棄地という専門的な用語も出ていたが、この言葉は次の分節で主要な話題になっている。

第3分節では、KZ25が耕作放棄地、土地、収入、若者、規則、大規模を用いて、耕作放棄地があっても、規則で新規に大規模な農業を始めることは難しいと、前分節でのTS23の意見に疑問を出している。教師はT28で土地、耕作放棄地を用いて、農地はないが耕作放棄地はいっぱいある、この意味を説明して欲しいと述べている。TZ29は耕作放棄地、虫、土地を用いて、耕作放棄地の活用の困難さ（放っておくと虫や菌が発生する）を述べている。教師はT32で土地、規則を用いて、農地の貸し借りや売買に制限があることを説明している。このように、本分節では、子どもから土地が4回、耕作放棄地が3回出て、耕作放棄地の活用を巡って意見が出ていた。また、耕作放棄地に虫が出ることも述べられていたが、この虫は第6分節で有機栽培に関しても出ている。

第4分節では、SE33が若者、ブランド化、値段、売れ、安心、強くを用いて、県が農作物のブランド化を図っている、その他にも様々な政策があるので日本の農業は強くなると述べている。TR35はネット、直接、消費者、売れ、利点、欠点を用いて、ネットを使った直接の販売の利点や欠点を指摘している。MT39もメディア、ネット、進化、強くを用いて、強い農業にするためにメディアを活用する、農業も進化が必要だと、強い農業にする方法を述べている。MS41は進化、技術、3K、イメージ、欠点、お金を用いて、農業の進化に関し

て、技術を活用して3Kのイメージを改善できると述べている。教師はT34でブランド化、T38でネット、T42でネット、機械を用いて、子どもの発言に含まれていた主要な言葉をその都度用いて対応している。本分節では子どもから強く、ネットが3回、売れ、欠点、進化が2回出て、強い農業にするために解決すべき欠点が述べられ、ネットの活用など、農業が進化する必要があるという意見が出ている。直接、消費者も1回出て、農家からの直接販売も言及されている。

第5分節では、YD45がお金、欠点を用いて、お金がかかるのが欠点と述べている。YD47は若者、支援、お金を用いて、新規就農者に支援はあるが足りない指摘している。YR49・51・53は支援を3回、土地を2回用いて、生活費が年間400万かかるので150万の支援では足りない、とお金の不足について具体的に述べている。MA59は支援、売れ、消費者、赤字、お金、土地、機械、欠点、若者を用いて、若者に農業の辛い現状も知ってもらって国に訴える、国の支援の必要性を周囲の人が共有することが大切だと述べている。RO61・65は収入、赤字、工夫、支援、強くを用いて、個人農家の事例をもとに、赤字にならずやっつけられる、工夫すれば支援はいらないし強い農家になれると、工夫の重要性を指摘している。それに対し、KZ67は工夫、収入、値段、若者、安心、支援、機械、お金、技術、強くと多くの言葉を用いて、工夫して儲けることはあるが、新しく始める人には国の支援が必要であると反論し、さらに最先端技術によって（農業を）強くすすめていけると述べている。本分節では子どもから支援が9回、お金が5回、赤字が4回、若者、土地、収入、強くが3回出て、農家（特に新規就農者）の生計が厳しいことが具体的に述べられている。また、強くも3回出て、強い農業にするための方策に関して、特に支援について異なる意見が出ている。教師はT52で土地を用いているだけである。

第6分節では、TYが11回の発言で、虫、売れ、値段を3回、有機を2回、収入を1回用いて、有機栽培は虫の処理が大変である、有機の農作物は見た目が悪いので安い、しかし、こういう農家が売れてほしい、と個人農家の有機栽培について詳しく、熱く語っている。本分節で主要な言葉を出しているのはこのYTだけであり、有機栽培の意義や課題を具体的に述べている。有機はここ

で初めて出た言葉である。教師はT92で値段を用いて、野菜のランクごとの値段を確認している。

第7分節では、SN101が有機、大規模、ネット、虫、企業を用いて、(第6分節で話題になっていた有機栽培とは)別の話とことわりながら、大規模農業ではICTとのコラボで虫の管理などが補える、農家と企業との連携が大切だと述べている。なお、この発言は前分節のTYの発言(有機栽培は虫の処理が大変)にも一部、関連している。YK103は値段、収入、売れ、支援を用いて、農家は自分で値段を設定できない、売り込むビジネスを知らない、農業の学校がもっと必要だと発言している。さらに、YK109は支援を用いて、(自分が訪問した)農家は支援にはあまり頼りたくないと考えていると発言している。YKの発言は第6分節のTY69(値段の格差がある)や、第5分節のRO65(工夫すれば支援はいらない)に関連している。KY117は有機、消費者、直接、利点、ネット、機械、強くを用いて、直売やネットや機械など、それぞれの利点を生かすことが強い農業につながっていく、と今までの子どもたちの意見をまとめている。本分節では子どもから有機が3回、ネット、直接、支援が2回、利点、強く、などが1回出て、有機以外の部分で強い農業にする方策が示されている。

第8分節では、教師がT118で大規模、進歩、新3K、ブランド化、利点を用いて、これまで出た子どもたちの発言を3種類(大規模、先進的、個人の農家)にまとめ、個人農家が一番困っているのでは、と子どもたちに尋ねている。MK121は売る、企業、消費者、お金、収入を用いて、いいものを作っているが売れない農家を助ける企業がある、と農家をサポートする企業について述べている。AY123は技術、土地、直接、値段、収入、欠点、消費者、安心を用いて、農協も技術とかのサポートをしてくれるが、価格を農協が決めるので直売の方がいい、消費者も安心できる、と述べている。TK125も直接、有機、値段、安心を用いて、有機野菜を直接買い取るレストランがあり、値段は双方で決めることができる、食べる人も安心と発言している。教師はT126で消費者、強くを用いて、授業の話題が消費者までいったと述べ、農業全体をみてどこを強くしていけばいいのか続けて考えようと述べて授業を終了している。本分節で

は子どもたちから消費者、収入、安心、直接、値段が2回づつ出て、直売の方が、自分たちで値段が設定できるし、消費者が安心すると、消費者の観点から望ましい農業のあり方が示されている。

このように、本授業は若者や新規の就農といった農業の担い手の話題から、土地の有効利用（耕作放棄地）、強い農業を目指す各種の農業（大規模、ICT、有機栽培）の利点や欠点、農業と他の企業との連携、最後は消費者の観点からみた農業のあり方の検討、といったように、幅広い学習内容が出ていた。さらに、収入が多くの分節（第2、第3、第5、第7、第8分節）で用いられ、産業としての収支が重視されていた。大きな議論にまではなっていないが、それぞれの意見には内容的な関連がよくみられた。

なお、以下、本授業に関して子どもが授業後、どのような感想をもったのか参考まで一例を示しておきたい。本実践において抽出児に設定されているSY（女兒）は本授業において発言はないが、授業後、以下のような授業日記を書いている。

個々の農家が思い通りの農業を展開できるようになることが、農家だけでなく、消費者にも利益があると思う。しかし、これを支援するのは国の役目だ。インタビューした人の中に、「理想だけど、将来スーツを着て農業がしてみたい。」という方がいた。私はその意見を聞いて、これこそが、強い農業するために訴えるべきことだと思った。現代の技術は、農業に取り入れられないもったいないからです。様々な角度から連携して働くことができる。…略…全員が、今農業を頑張っているのにさらに目標があるということは、上を目指せる意志があるともとれる。私たちが声を届けて、反映できるようにすべきだ。

ここには、様々な農業の重要性、および国によるその支援の必要性、さらに各分野の技術との連携、仕事への目標や意志を持つことの大切さ、農業の発展を支える自分たちの役割など、単に知的な面だけでなく意思の面も含めて、幅広く、かつ主体的な学習ができていることが示されている。そして、そのことは本授業の内容ともよくリンクしている。

5. 授業での学習内容

本授業では豊富な学習内容が現れているので、特にこの点に関して詳しく見ていく。「発言表」をもとに作成した〈本実践での学習内容の展開図…授業実践の「言語的トポス」〉を参照されたい。ここでいう授業実践の「言語的トポス」¹¹⁾とは、あるテーマのもとになされた授業実践における発言・表現の集積所であり、教育の世界での知的遺産として、類似性を持つ教育実践に対して参照可能性を持つものとする。

今回、本授業で出現した主要な言葉を、その類似性や関係性から7つの内容群にわけることができた。各群のテーマをつけると以下ようになる。1群（若者の就農）、第2群（土地の活用）、第3群（強い農業）、第4群（農業の進化）、第5群（農業の収支）、第6群（有機栽培）、第7群（消費者と農業の関連）である。以下、その内容群ごとに検討していく。

第1群（若者の就農）では、若者、3K、新3K、イメージ、メディアが用いられて、若者の就農（新規就農者）を増やすため、3Kという農業のイメージを変えて新3Kをメディアなどで広めるといった内容構成になっている。

第2群（土地の活用）では、土地、耕作放棄地、規則、大規模が用いられている。（新規就農者には）農業を行える土地が少ない、耕作放棄地を預かり大規模に農業をやっているところがあるが、耕作放棄地は規則があって新しく始めにくい、といった内容構成になっている。

第3群（強い農業）では、強く、欠点、利点、工夫が用いられている。これらの言葉は第4分節から第6分節、および第8分節で出ていた。強い農業を目指すために、現在の農業の欠点や利点が示され、さらに工夫の必要性が出ていた。よりよい社会を考える本授業の核となる部分である。この強くは、この教師が子どもたちに現在、将来において強かに生きることを望んでいることが反映された言葉であり、ロゴス（論理）だけでなくパトス（感性・意志）にも関わっている。

第4群（農業の進化）では、ブランド化、進化、技術、ネットが出ています。これらはいずれも、進化した農業の内実を示している。この内容も、今後の産業の発展を考える意味で重要である。

第5群（農業の収支）では、支援、お金、収入、赤字、機械が用いられている。新規就農者には支援があるが、機械や設備を揃えたり、果物栽培は最初何年間も収穫がなかったりして、赤字になることが多い、といった内容構成になっている。この内容は、産業の持続性を考える点で重要である。

第6群（有機栽培）では、有機、虫、売れ、値段が用いられている。特に第6分節でTYが多く用いていた。有機栽培は虫の処理が大変である、なかなか売れないし値段も高くできない、といった内容構成で、TYの強いこだわり、思いが具体的に示されている。

第7群（消費者と農業の関連）では、直接、企業、消費者、安心が用いられている。農家は消費者と直接むすびついたほうが、自分で価格を決められるし、消費者も安心であるといった内容構成になっている。売れない農家をサポートする企業のことでも出ており、これからの社会のあり方（環境への配慮、異分野の連携の重要性）を示すものとなっている。

このように見てくれば、本授業実践は、子どもたちがこれからの社会について、農業を中心に様々に考えて理解を深めていくという、直接的な教育活動としての意義だけでなく、日本の社会（農業、さらには産業一般）のあり方に関して教師と子どもたちとで包括的な教材研究をしている、と言えるほど、貴重な学習内容が現地取材をもとに生成されている点でも意義がある。教育学部の附属中学校という特別な条件はあるが、この実践で示された豊富な学習内容は他の中学校（あるいは小学校）でも類似の構造性のある教育実践（同じ単元とは限らない）を構想する際に、参照可能性が高いと言えるのではなかろうか。無論、そのまま同じ形というのではなく、この内容構造のどこかに焦点を置く、あるいは、ここで出なかった内容（例えば、農産物などの輸入・輸出など）を扱う際にも、ここで出た内容構造と対照させて構成していくこともできよう。さらに、自分の生活を見つめ直し人の動きや気持ちをとらえていくような学習を展開するのであれば（社会科の初志をつらぬく会の問題解決学習はこのようなタイプが多いが）、特に人の気持ちや動きが把握しやすい個人や小さな団体（ここでは個人農家）の活動の追究に焦点を置き、他の局面は関連する条件・環境

として周辺に位置づける、といった計画・構想への示唆を得ることもできよう。

6. まとめ

以上のように、「発言表」を用いて授業を分析し、「学習内容の展開図」を作成することで、(前述の重松のまとめに準拠すると)今回、特に④教材の展開(学習内容の実際の展開)について、本実践の意義を示すことができた。その他にも②こだわる子の再評価(本授業では例えばTYの個人農家へのこだわり、強い気持ちなど)、および③教師の出場(子どもの意見の確認、特にTYへの対応や、その後のまとめ方など)についても、その意味を示すことができたと思われる。なお、⑤評価への道、に関しては、例えばTYのように十分、発言している子どもについては、その発展の契機について若干、示唆を得ることができると思えるが、やはり他の資料(本実践では生活日記、授業日記、単元まとめ)などを活用して、授業とより関連づけて検討する必要がある¹²⁾。また、授業中発言がなかった子どもに関しては、特に授業外の他の情報が重要になるといえる。さらに①教師の自己変革、についても、本研究では、その点での情報を得ていないこともあり、明らかにはできなかった。ただ、その一方で、子どもたちの授業での相互関係(論理的な関係)については示すことができたと考える。本授業の分析では、真正面から対立する議論といった派手な形ではないが、他者の発言内容をよく聞いて、関連的に対応する子どもたちの活動が示されている。また各自、自分の調べたことに自信と責任を持って、丁寧に発表していた。このような子どもたちの姿は、「主体的で対話的な深い学び」を具現化しているものであり、これからの授業づくりの目標(望むべき子どもの姿)に対して示唆を与え得る。

筆者は、教育実践からの参照可能性は理論という、論理的な記述だけでなく、授業の実際そのものにもあると考えるので、実施された授業の記録をより参照可能な様相に構成して、その授業の意義を示すこと(そのことが授業分析から授業づくりへの「方途」の一つと考える)に今後も努めていきたい。それはお手本にすべき授業モデルを提示するということではなく、実践者があくまでも

主体性を維持しつつ、必要に応じて参照することができる授業の資料および分析結果を積み上げていくことである。そして、そのことは授業分析による学問的な成果の提案にも最終的に通ずると考える。¹³⁾

[注]

- 1) 重松は授業分析を、授業をできるだけ詳細にかつ客観的に観察し記録し、それを素材に研究することであると述べている。重松鷹泰『授業分析の方法』明治図書 1961年 11頁。
- 2) 中村亨が「発言表」の理論やオリジナルタイプを考案した。中村亨「発言表を使用する授業分析 —授業における子どもの相互関係にふれて—」『教育方法学研究』第12巻。筆者(田代)はこの「発言表」のさらなる開発や応用に取り組んできた。1987年。田代裕一「発言表を使用する授業分析 —ワープロ処理による授業の内容的構造の追究—」『教育方法学研究』第14巻 1989年、「授業実践の様相—解釈的研究 —グループ活動を含む授業事例の分析—」『教育方法学研究』第35巻 2010年、など。
- 3) 柴田好章は、教育学的な授業分析に求められる条件を5つに整理しているが、その条件の一つが「教育実践からの参照可能性のある理論構成」である。柴田好章「教育学研究における知的生産としての授業分析の可能性 —重松鷹泰・日比裕の授業分析の方法を手がかりに—」『教育学研究』第74第2号 2007年 58頁。
- 4) 堀部健一郎「社会科の初志をつらぬく会における授業研究・授業分析論の研究 —「『考える子ども』からの一考察—」「考える子ども」376号 2017年 24-31頁。
- 5) 中村亨は、「授業においては、明確な条件規定が行なわれ得ないことが常態であるので、授業分析により、方法論的明確さをもつ指導技術を獲得しようとする試みは、例外なく失敗するといつてよい。得られるものは、そういった直接的な効果でなく、一旦、教師の人間内部に蓄積される種類のものである」と述べ、授業分析の結果がそのまま即刻、直接、授業づくりに結びつき難いこと、しかし、より根底的な面(例えば、教師の教育観や授業観の形成・変革など…これは筆者の推測である)に寄与できる可能性があることを指摘している。帝塚山学園授業研究所『授業分析の理論』明治図書 1978年 54-55頁。
- 6) 前掲1) 18頁。
- 7) 前掲5) 7-17頁。
- 8) 今回、「発言表」は東芝のRupoV980で作成した。パソコン(Excel)でも作成できるが、微妙な箇所の表現が難しく、旧式のワープロのほうが授業のアナログ的表現には適している。
- 9) 例えば、以下のような発表がなされている。④埜志保「話し合い活動における価値の共有に関する研究 —中学校3年社会科授業の分析—」日本教育方法学会第54回発表要旨(2018年)65頁、および発表資料。本発表では逐語記録に基づく従来の定性的な分析、および定量的な分析(発言内の語の出現頻度の数値化による「累

積相対度数グラフ」の作成)が関連的に実施されている。②中道豊彦他「中学校社会科授業における意見交流過程の分析—中間項の拡張による発言の関連可視化と内容構造—」同上要旨 102 頁。本発表は、名古屋大学教育方法学研究室がこれまで開発してきた「中間項」や「数量化中間項」を用いて授業の意見交流過程を分析したものである。いずれの授業分析も直接の研究目的・方法は筆者の研究とは異なっているが、同一の授業を対象にしているので、今後、本論考の分析結果との比較検討(相互的補足)を行うことも可能だと考える。

- 10) 「社会科の初志をつらぬく会」は民主主義社会を支える人間の形成を目指し、そのための教育方法として、問題解決学習を重視している。
- 11) 中村雄二郎は、言語的トポスに関して以下のように述べている。「すなわちギリシャ語では言語についてトポスとは、とりわけ、人間の知的・言語的な遺産としての、或る主題についてのさまざまな考え方、言い表し方の集積所(貯蔵庫)を意味している。』『トポス 場所』弘文堂 1989年 7頁。授業実践の「言語的トポス」とはこのような考え方を授業研究に援用したものである。
- 12) 重松も、子どもの可能性の把握に関して、子どもの全生活、生活史に入り込んで、その生き方、考え方をとらえ、授業後の活動(テストなども含めて)も追究して、それらと授業中のその子の言動とを関連的に検討することが始められていると述べている。前掲 1) 16-17 頁。
- 13) 中村亨は授業分析においてより確かな一般性を確保するには、事実とその解釈に対する開かれた検証可能性や、研究結果の蓄積と相互的な補足が必要であると指摘し、このような事実と解釈の検討の環を広げることが、授業の可能性を示すことに通じると述べている。前掲 5) 56-57 頁。

Y県 A中学校3年 T先生指導 社会科 ④ 2017年12月13日

「よりよい社会を目指して一強かに生きる—」
授業における発言内容の一部 各分面での主要な言葉

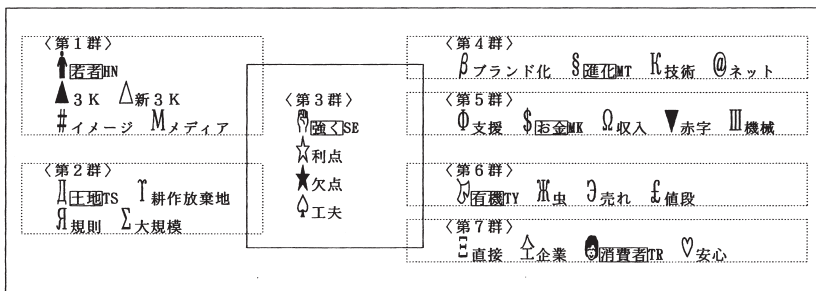
分面	教師	子ども	教師	子ども
1	藤井さん なかなかにういうの	作れない	(前表に記録)	(前表に記録)
2	なかなかに新しい条件を選んで藤井さんのナスを載せて	藤井さん 500本 有機栽培 藤原さん 約2000本で		
3	こっちは500本?こっちは	藤井さんは一人で作業して藤原さんは収穫期にはバイトですが大きな違いかとどちらでも市場から消費者にもものを出す 消費者の口に入るまでの期間のロスタイム 小久井農協販売 確かに利益はあるなって収益分野 ICTとか機械の導入 先かして 生き残って		
4	今大きく言うと 3期前かほど大規模の川井さんみたいな先進的なところ?新3Kだよ 子ども ブランド化もあとトマの農家 藤井さん 藤原さんとか 個人というか 別点、一家揃っていろいろの	藤原さんは6年	Σ s △ β ☆ ◎ ◎	◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎ ◎◎◎◎◎
5	こっちは6年か、全体でどう	本当はすていいものを作って作れない 農家を助ける 企業そういうことを 農業に集約は		
6	AYさん	農産とか技術のサポート 農家がほとんどタダになる 販売だと自分で値段が決まらねばいけど、農協 値段決めちゃうとそれだけメリットがあるって 販売の方が消費者の顔が見える	8	
7	時間、みんなの時間をたい	そのレストラは農家から直接野菜を運ぶって 有機野菜を 農協 農家さんとレストラ 交渉して決める 納得いく値段 集めてる人も変わってる		
8	余半 消費者のところでどうかって 農産全体を見て、強くなるにはどこを強くして、編けて考える	これだけ社会の勉強を終わります		

* 本授業で出た主要な言葉とその記号 (出現順)

<ul style="list-style-type: none"> ▲……若者・若い人・新規就農業者・始める人・新しい人 ▲……3K △……新3K Ω……収入・儲(かる・け)・利益 #……イメージ M……メディア \$……お金 @……ネット・IT・ICT ⌒……土地・農地 ⌒……支授・資金 Ⅲ……機械・機械化・農機 Σ……大規模・大規模農業 T……耕作放棄地 虫……虫 ⌒……規則・規制 	<ul style="list-style-type: none"> β……ブランド化 ⌒……値段・高値 ⌒……売(れ・る・り・ら) ♡……安心 ◎……強(く・い) ◎……直接・直売 ◎……消費者 ★……欠点・課題・困ったこと・嫌な面 人……デメリット ⌒……利点 S……進化・先進的 K……技術・最先端技術 ▼……赤字 ⌒……工夫 ⌒……有機(栽培・野菜・肥料) ⌒……企業
--	--

* 発言者名欄で・印が付いているのは女兒。ないのは男児。

〈本授業での学習内容の展開図…授業実践の言語的トボス〉



- * □ で囲んでいるのは、その群のテーマを端的に示している言葉である。
- * の後のアルファベットは、その言葉を最初に用いた子どもの名前（仮名）である。
- * 各群は、時系列で整理している。ただ、第3群は全体に広く関連している。
- * 各群における言葉は、その群だけではなく、他の群でも出ていることがあるが、主に出現している所に配置している。